

主人の思い出

保土ヶ谷区支部 北島 カツミ（妻）

戦没者 北島 秀吉

戦没地 ジャワ島

昭和十六年四月二十九日結婚して、二泊三日の箱根への新婚旅行。一番最初の言葉が、何時軍隊生活に入るかわからない、もし、男の子が生まれたら「智加敏」と言う名前をつけて呉れ、中学時代から友達にわが子に付ける名前と言っていたそうである。女の子なら、お前の好きな名前をつけなさい。であった。

この頃（昭和十六年）は東海道線の電車が家の前を通っているので、毎日バンザイバンザイでした。中には石に包んだ手紙（走り書き）を投げる人もあり、お願いごとや住所が書いてあり、そこに送ってあげたこともありました。御礼の手紙には南方方面に向かわれるとの家族への知らせだったそうです。

昭和十八年十二月二十五日お正月の煮物をしている時、主人に召集令状が届きました。いつかはと、覚悟し心得てはいたものの矢張り現実のものになると涙に暮れました。

正月もそこそこに、一月五日、親戚一同やご近所の方々の見送りを受けて保土ヶ谷駅から出征

しました。その前年の七月七日男の子が誕生して、主人が「智加敏」と名づけて大喜びで可愛がっていた息子は六ヶ月でした。

その後、何も連絡がなくて心配しておりました矢先に、南方方面に立つから面会に来てくれ、と連絡があり、横浜から六時間の豊橋まで、子供を抱き、主人の姉と私の妹とで面会に向かいました。約一時間の面会、豊橋駅で後ろを振り向かないからそのままが良い、との言葉が最期の別れでした。

そして、昭和十九年十一月十日ジャワ・ナンギス岬でB24の爆撃直弾により全身が爆砕したとの知らせがありました。

主人が、結婚記念にと植えて行つた柿の木三本のうち二本は枯れてしまいましたが、一本は毎年沢山の実をつけてくれます。毎年、私は靖国神社にお手紙と共に送りしています。私の心が少しでも晴れる気がします。

主人の写真はいつまでも若くて凛々しいままです。生きていたら、智加敏と酒でも酌み交わしているだろうか、私とお茶でも飲みながら四方山話でもしているだろうか、と主人を偲んでおります。